方向　第二三号　一九八三年四月三日発行　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

わたしの兵隊手帳（六）

赤谷明海

〈昭和十九年〉（十月十二日付、大塚〈五郎〉先生端書（十月二十四日受）

御はがきどんなに小生の心を明るくしてくれたか御想像相成度候　種々なる取沙汰があつて一艸舎同行特に原田平野など大いに心配いたし居り候処健在のしらせを得て実に愉快に存じ候　小生はおかげで其後何の変化もなく勤務致し居り候間御安心被下度し　気胸は相変らず続け居り候　学校もすつかり様相をかへて勤労動員に出動致し居り候　小生は勿論残留組にて候　朗は只今神奈川県大船の方に勤務、元気よくやつてゐる模様に御座候　一艸舎も寂しくは相成り候へ共この六日にも研究会を開き艸もぼちぼち出し居る様な次第、これ亦御放念被下度候　小生の大和もの君が出てゆかれてよりとんとその気分を失くしてあれから一度も大和へは足を踏み入れざる有様、御はづかしき事に候　しかし何とかいたし度き望みは捨て得ず、ただ君の居らざる大和が味気なく足が遠のき居る次第に御座候　満洲の地既に寒さに向ひ居る事と存ぜられ候　何卒御自愛専一に願上候　奉天には高田平二朗君が居る筈、或はさうした暇もあるまじく存じ候も機を得て逢はるゝも面白からんと存ぜられ候　どうぞ出来る限り御たより下され度く待ち入り候　いづれまた

・十月十七日付弟四郎端書（二十六日受）

九月の初、母・姉・妹・修上京

・十月六日付家ヨリノ端書（十五日受）

九月二十七日修入営へ※一九八三年三月二十三日付赤谷君の手紙によると「父からの便りだったでしょう」〉

○秋田県鹿角郡ノ一老人手紙

拝啓オテガミオアリガトウ。オテガミニヨレバ、オマイモアイカワラヂゲンキノコトトオモテオリマス。マタワ、ワタシタツヘ私達〉モミンナ、アイカワラヂゲンキデ、オリマスカラ、ゴアンシンクダサイ。タエ子モゲンキデマイニツヘ毎日〉、アソンデ、オリマシカラ、ゴアンシンクダサイ。トモダツト、カダヘ門？〉デマイニツ、アソンデオリマス。マタワ、オマイモ、ゲンキデハタライテイルデショネ。オカラダオ、キオツケテ、オハタラキ、クダサイ。オマイノイルホウモ、サムクナリマシタデショネ、ナイツヘ内地〉モイマワ、サムクナリマシタノデス。

ウチノホウデワ、イマワ、イネヲカテオリマス。ワタクシタツモカテオリマス。イネオソテハサヘ袖架？外架？〉ニカケテカラ、カゼガフイテハサオコロバシマシタノデス。ソノコロンダハサオ熊坂ノエズヘ？※ヲヂ？〉ガラカケテモラエマシタ。オセワニナテオリマスカラ、オマイモオテガミオダシニヨイトキワ、ヨコシテ下サイ。エギヅエノ人タツカラモナンボカ、オセワニナルダカ、ナテオリマスカラ、オマイモ、オテガミオダシニヨイトキワヨコシテ下サイ。ミナサマノオセワニナテオリマス。ソレカラオマイノトコロニ、カミシリヘ剃刀？〉オヤ

リマシタガ、オマイガ　マンヒウヘ満州〉ニキテカラ　イタダロネ。オマイニ、ワタヘ渡ら〉ナイデショネ。モドテクルカモシレナイ。オテカミモダシマシタガ　ソレモ、モドテクルデシヨ。オテカミノナカニ、オンマブリヘ御守〉オ、イレテヤリマシタノデスガ、モドテクルデシヨ。ソノオンマブリガ、ヤハダノ八ズマンサマノオンマブリデス。ワタクシタツワ、ソノカミサマニ、イテキマシタノデス。ヒトバン、トマテキマシタノデス。ソノオンマブリオ、イレタオテガミガモドテクルデシヨ、ナサケナイノデス。コンド、ソノオテガミガキタナラバシグヘ直ぐ〉ニオンマブリトカミシリトヤリマシカラ、マテ下サイ。ソレカラ、シヤシンオ、トテオクテヘ撮って送って〉下サイ、ワタクシタツモヤリマシタカラ、オマイモオクテ下さいヘマヽ〉。

（別筆）では御身御大切に御働き下さい　ではサヨナラ　ヨシエ

備考　ヨシエハ名宛人ノ妻、老婆ノ嫁ナリ

へ備考まで添えている。よほど関心をよせたとみえる。成田古兵殿を想い出すことはできないが、この返事を頼まれたのであろう。〉

へ※赤谷君の筆写した『手帳』のコピーの、大塚先生の手紙からあと老婆の手紙の「エギヅエノ人タツカラモナンボカ、オセワニナルダカ、ナテオリマスカラ、」までの分を紛失し、再び赤谷君をわずらわせ、元の手帳から筆写したものを一九八三年三月二十三日付手紙でもらった。そこに添えられた文「以上です。直子に渡した写しにどんな註釈を加えたものか記憶がありません。」老婆は成田寅吉一等兵の母、熊坂は成田氏の住所の小字名。但し「熊坂ノエズ」とは誰を指すのか今では判じかねます。」〉

○十月二十一日付原田憲雄端書（三十一日受）

死んだと云ふ噂の立つた君から便りが来たので、この間の一艸舎の会はこの上もなく嬉しい集ひだつた。飛んでもないデマの飛ぶものだ。が一方から言へば皆が本当に君の事を案じてゐたのだとも考へられ、同行の気持が嬉しかつた。忙しい日が続き しみじみ便もかけない。今篤さんが来てゐる。例の如くとりとめもない話をし合つてゐるが、かうした時間もどれだけ続けられる事であらうか。君がたつてしばらくして、僕も支那の町々村々をめぐり 八月の初に帰洛した。北京は一日しか居なかつたがやはり一番印象が深い。又しばらくしてこの地を去ることになるかもしれない。艸の発行も遅れがちながら 皆真面目に書き続けてゐる。この間一年振位に平野に逢つた。嬉しかつた。元気でやつてくれ給へ。

○十月二十六日付森本孝順師端書（十一月四日受）

入隊以来長らく何処にも通知なかつた為に随分と取り込へ越ゝし苦労をし京都の森田氏に宛てた第一報で再生の祝杯を挙げました。開山忌は予定通り第二回の頌徳会の総会も無事に終りました。念仏会は戦時所置として十九、二十日の二日に短縮しました。それより福永君が去る八日に得度して英海房孝円と改名致しました。長老は日増しに健在です。月末に二十三年振りで東上、文部省の会合に参加致します。

〈福永君は延命寺上田覚城師の世話で唐招提寺に来ていた書生。長老に給仕していた。〉

○十月二十三日付松尾叔父上ヨリ端書（四日受）

〈松尾の叔父は大阪市天王寺区六万体町で饅頭屋を営んでいた。母の弟武雄のこと。戦後東住吉田辺東ノ町に移住〉

・十月二十三日付宮崎篤三郎手紙（四日受）

・十月二十五日付服部晃英はがき（四日受）

久しく貴兄隊名不明にて案じ居りましたが、一大安心しました。三月貴兄出征以後一度帰省された模様にて其後の便りを待つこと実に久しいものでした。満州の彼方に遙かに貴兄をしのびながら　唐招提寺の風の音と　実に印象深く感深いものがあります。東森〈善城〉と貴兄の後をうけて後藤〈敬三〉、松浦〈一嶺〉と征き、更に本月（十月）十五日には最後の山崎〈慶輝〉も征き（青森）、現在は旧友唯一人原田兄のみ軍ー〈ママ、伏字〉で京都に在住する許りです。後藤は東京に入り、先月にて三ヶ月を過ぎたが以後音信なく、松浦は宮城県下にて張り切つてゐる模様、松浦の隊名は帰京後お知らせしませう。――小生平中〈平安中学〉に奉職し居り、現在動員中の生徒と共に表記場所にて寮生活を行ひ居ります。（これは一週間毎）から今月末には帰京します――山崎とは彼の研究科卒業〈のとき〉と式場で一緒で、十月には奈良へ行き留守中の西方院へでも行きたき旨打合はせて居りましたが、これも夢となり、勇躍十月十二日京都を出発しました。竹内〈不成〉は大本営付となり東都に在住。武田〈浄真〉は病気にて浜田陸軍病院へ入院中、菅本〈覚了〉、江田大摂〈、水谷〈英俊〉は昨今便りありません。東森に逢はれたら何卒よろしく。小生の隊に生徒で原田禹雄君が居り、色々貴兄のことども語り合つて居ります。また帰京してより詳しく。

〈服部をはじめ、文中の諸君は竜大の同窓。ただし原田禹雄君は憲雄君の弟で、当時平安中学に在学し、尼崎の工場へ勤労動員中。服部が帰郷後、出したであろう第二信は入手していない。なおこのはがきの一部は『平安学

園と私』に転載している（一四九頁）

・十月二十五日付松浦鉄城氏端書（五日受）

拝啓　御葉書拝受へ子息〉一嶺事、四月十四日令状受領、五月一日へ三重県〉久居部隊に入り、其後転隊、宮城県名取郡玉浦村東部第一八九三七部隊山下隊に罷在へまかりあり〉、無事御奉公致居候間、御休心の程希上候、貴下にも御機嫌よく軍務御精進奉大賀候、何卒御自愛の程念上候早々。

へ氏は彦根市鳥居本専宗寺住職、竜大の同窓旧姓加藤一嶺の養父。

・十月二十七日付木寅辰治氏端書（六日受）

兼ねて心配してゐた孝順師と福永氏との間柄につき、師の潔癖性が兎角福永氏の煩ひの種となりゐるらしい様子がうかがはれる。へ木寅氏は唐招提寺の出入僧へでいりがしら〉。同寺門前住。

・十月二十七日付北浦良子氏手紙（六日受）

大塚先生との間に幾分の溝のある事が窺はれ心配である。

×山百合のこぼれ落ちたる床の間に夕陽ひとすぢ影をひくかも

×咲き残る百日紅に陽の照りて枝さす空の限なき青さ

×さえへ原漢字〉し空に色づき枯れし桐の葉の梢さむざむゆるる秋風

×たそがれの道の底冷えあしもとにこほろぎへ※原漢字〉ひとつとまりゐるかも

×猿沢の柳に月の影さして兵士等が征くを黙へもだ〉し送りぬ

×はかりがたき人の心の寂しさに独りを想ひわれは疲れぬ

〈北浦氏は当時奈良市宿院町に住み育英高女に勤めてゐた。西方院から出征する時、大塚先生の歌茶わん〈※石十宛、以下同じ〉五個揃いの一個が破れたので、三個を氏に贈った。その三個の行方（ゆくえ）について先生が『大和への思慕』（未刊）に書いておられたが、委細は忘れてしまった。贈り残した一個はまだ私がもっている。直子も見たことがあるだろう。

○十一月五日夜中かわや〈※原漢字〉に立つたが、戻つても眠りつけず、種々駆けめぐる想念を、駆けるが儘に任してゐたところ、ふと軍隊の諸規定、就中勅諭〈軍人に賜りたる勅諭〉と戒律との吻合点に〈想い〉到り、果へ俄〉然それより枝葉を拡げて熱中し、愈々以て眠りつく事は出来なかつた。今その殆どを忘れてしまつたが、その時に浮び出た断片的な思念は、正にパンセ〈パスカルの瞑想録〉やフラグメンテ（ノヴァーリス）に匹敵するとさへ自負するだけの透徹さと斬新さとをそなへてゐた様に思へてならない。禅定の形式などどうでもよい。ただ曾爾〈奈良県宇陀郡曾爾村〉の山奥の様な処で、静寂な身心を整へる事さへ出来れば、自分の如きにも見性の大業は成就出来る様な気さへした。〈えらくたかぶつている。昔の高僧のような山中での修行にあこがれるのは出征前からのこと。軍隊に入っても、まだその夢想から覚めていない。右の勅諭と戒律との吻合らしいものを次に記す。〉

忠節
礼儀
武勇

何故五ケ条ヲ表示シタカ――戒律箇条

点呼――読誦――読経ノ形式化

信義
質素
↑徳目
・信徒宣誓文（我等皇国ノ民　我等ハ仏陀ノ御子）
・簡単ナル組織系統ヲ有スル宗義表示
戒律　法律
道徳
・経典翻訳（長行〈じょうぎょう・経典の散文〉ヲ散文意訳口語体、伽陀〈かだ・経典の詩文〉文語体詩文）

〈律宗の現代化について、軍隊生活と対比しながら、あれこれ思っていたのであろう。〉

夜来庵かぜだより　―若い日の森田曠平―　（六）

原田憲雄編

〈一九三六（昭和十一）年五月七日よる付、八日午前、伏見局消印、はがき。住所なし。

その後は御無沙汰してゐる。君からも便りがないので淋しい。土田耕平〈アララギの歌人〉の「青杉」〈第一歌集・一九二二年刊〉三〇銭で買つた。読んでみてそのすばらしいのに驚く。此の頃は読書も出来ぬ。つかれきつてしまふからだ。万葉もよみたいが読めぬ。あれから全然だめだ。

保全〈永楽・京都の陶工・一七九五―一八五四〉の杯を買つた。二百年程前のものだ。非常にいゝ。それと古唐津の杯だ。一度この杯で酒をのみたいと思つてゐる。

五月二十日　午後、伏見消印。陶工曠平。

御親切なお手紙ありがたう。

例によつてハガキで間にあはせるがあしからず。

初夏のうらさびしさや嵯峨野来て路にこゝたききんぽうげかも。

雨ばれの広沢の池は波もなしのらりと高き山のかげ見えて。

若葉なす楓林をこゆるなべ古りしみ寺のいらかを見たり。

向山はなべて若葉せり雨ばれの空に高きは目にすがすがし。

緑なす若葉の山なみひとゝころ雲のあひ間ゆ陽はあたりたり。

土田耕平「青杉」に刺戟を受けて小生作歌態度一変した。素樸、これが現在の僕のモットオだ。右の歌にこれが出てゐるかどうか。君これを評せよ。

芋の葉のやれ葉大きくゆらぎ居り野分の空はただにあかるし。耕平

六月三日　午後、聖護院局消印、伏見区桃山町　曠平。手紙。

君からの便りありがたく読んだ。

入場券へよくおぼえていないが、たぶん観世能の〻二枚送つて呉れたね。しかし僕が八時に帰つてみると君の手紙が来てゐたのだ。そんな都合で彼女にも言へぬし　又　僕も行くことが出来なかつた。あしからず。

君は増々歌が出来なくなつたと言つてゐるが、こちらは少しも出来ない。毎日少しも作らない。最近作つた日は

少しもない。みんな疲れてねむつてしまふ。十一時を過ぎることがあるんだからね。同情してくれ。

この間　一日休んだ時、三首程出来た。それと一緒に〈島木〉赤彦〈アララギの歌人・前記土田耕平の師・一八七六―一九二六〉の柿蔭集を読んで再嘆した。〈柿蔭集は一九二六年死後刊〉耕平の青杉に感激し　又、赤彦の柿蔭集を読んで驚死しかけた。

晩年の赤彦の面目は実にすばらしい重厚さと素樸さで表現されてゐる。まだ半分しか読むひまがないが実にいゝ。何とかして全部読みたいと思ふが時間がない。

この手紙を書き終へたら京都へ出発する。すこし用事が出来たからだ。しかし君の所へは行く暇がないので残念だ。その要件をすましたら　今晩すぐ帰る。吾妹には会ふつもりをしてゐる。

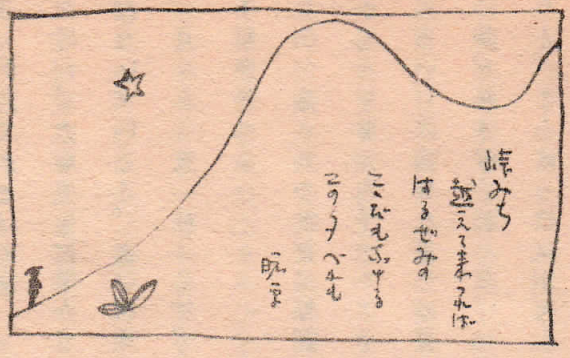
君の歌風はだんだん僕から遠ざかつて行く。時には新古今風の歌が見えて来たやうだ。すこし僕の立場として淋しい。〈森田〉直一の歌は素樸さがないが花やかな所がある。（まだ完成したものではないが）彼の将来も恐らく新古今風の歌で終ると思ふ。

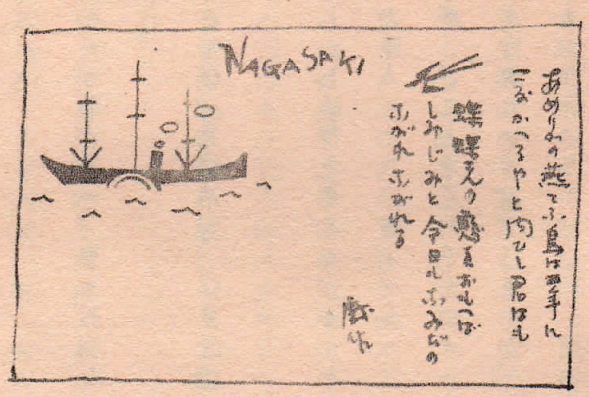
ところで君は近頃新古今を読んだのと違ふか。僕の万葉たふとびも万葉歌人及その一派の人達の信仰で終つてしまひさうな気がする。それ程現在の自分の歌風がいやになるしあきたらぬ。しみじみ下手な歌だと感ずる。君は努力をしてゐるが、僕は自分でさう感じてもそれに対して何か手段を考へるでもなし、努力をするでもなし、君達からだんだん後れて一人とりのこされてゐる様な感じがする。

ろくろ〈原漢字〉はこの頃杯ばかりひいてゐる。杯もむつかしいものだ。一度いゝのが出来たらかま〈原漢字〉

へ入れてみようと思つてゐる。

そんな風に　自分の本分の方に全精力を集中するので　心の楽しみとする歌の方へ費す精力がなくなつてしまふ。





僕は自分の本職を完成（完成といつてもある程度までの完成）するまで恐らくもう読めぬだらうと思つてゐる。

先日　少し作つたものを書いて批評を乞ふ。

五月空はれきはまりて向山はなべて濃あをとなりにけるかも。

白雲のゆたにたゆたう丘の上にのぼれば嵯峨野見えわたりたり。

さびしらに秀へほゝのゆるるなべ麦畑は日暮れて雨のふりそめにけり。

峠みち越えて来つれば春ぜみのこゑだも鳴けるこの夕べかも。

枯魚大人

六月十三日　付、午後、伏見局消印。はがき。

長文の手紙を書いたが破つた。

椿々庵・曠平

次のことをすまぬが知らしてくれないか。実はまだ添削歌稿を送つてないから　面倒くさいから　投稿しようと思つてゐるのだ。君もへ添削ではなく投稿として〉出したまへ。

1　選者を指定する場合だへママ〉うしたらよいか。

2　指名するのなら誰がよいか。

3　開封でかまはぬか。

右だけだ。大塚先生に聞かうと思つたが暇がない。君も投稿したまへ。そして一度　それを聞いてくれないか。夜はたいていゐる。遊びに来てくれ。

六　月　十　五　日　付、十六日午後伏見局消印。伏見区桃山丹後七、小山方。

お手紙拝見

へ森田〉直一君の批評は酷評だ。しかし成程と思ふ点が多くある。先日も僕の作品に相当てひどく言つて来た。しかしへ伊藤〉左千夫へアララギの歌人・一八六四－一九一三〉がへ与謝野〉晶子の歌を評してゐるのよりはまだぬるい。成程さう言へば彼氏の顔　どことなく左千夫のオッサンに似てゐる所がある。

君の詩、興味深く読んだ。一句々々は美しい言葉ではあるが、全体の統一上から見て、少しバラバラではないだらうか。ことに　彼女が死んでしまつたといふ所は全然　前の句　と別のものだ。突然死んだのだから　突然置いたのかも知れぬが、それにしても少し変だ。へこの頃の原田の作はほとんど失われ、この「詩」も存しない〉自由短歌の方はい、と思つた。鋭い断面！　が一番すきだつた。

詩に興味を持ち出したさうだが、それもいゝだらう。何にしろ皆長所がある。色々なものをやつてみて　どれが一番自分に適してゐるかを発見することが大切だと思ふ。

君の詩はろまんていつくだ。ろまんすを歌ふには詩がいゝかも知れぬ。僕も前は作つたことがある。佐藤春夫の詩を崇拝したものだつた。

君は子供へたぶん憲雄の妹のテルミ。この年生れたゝをだいてあの手紙を書いたさうだ。僕はそんな君の生活がうらやましい。僕には何にもひたぶるに愛することが出来ぬ性質だ。所謂孝子の話しを聞くと彼は何んであんなに親を愛することが出来たのだらう。と考へる。

心中した男女は、何で死ぬ程彼等は互に愛し合ふことが出来たのだらうと不思議に思ふ。この様に言つても決して女を愛することが出来ないのではない。ただひたぶるに愛することが出来ないのだ。これは愛することが出来ないのより悲しいことだ。此処にAといふ女があつてそれが僕を非常に愛してゐる。（笑はずに聞いてくれ給へ）そして僕も矢張りそのAを愛してゐた。けれども何時の間にか僕の心はBといふ女にうつつて行く。Aはそれを知らぬ。としたらどうだらう。僕の心は二つに分れる。僕はAの何にも知らぬ笑顔を見ることがどれ程の苦痛だらう。恐らくこの心は君には分るまい。もし君だつたらこの場合何うする？　それは答へを待つより今、僕が言つてしまつた方が早い。恐らく君はAを愛する様にしろ　と言ふだらう。それともBに行けといふかい？　サーニンならBへ行くだらう。しかし僕はまだAも愛してゐるのだよ。僕はイワン・カラマーゾフではなくて　ドミトリー・カラマーゾフだ。

朝鮮人の夫婦は浦山しい。ありらんの唄は彼等の望郷の心だらう。

ありらん峠はさびしかろ　日暮れて来ればさびしかろ

彼等の生活が本当の人間の生活かも知れぬ。なまじつか少々むつかしいことを考へる我々は不幸なものだ。

ありらん峠越ゆれば三日月さんが可愛いあの子の眉に似て。

小生今寝床にあり。（同衾ではないから変なものはついておらぬ。）此の二三日少々健康悪し。しかすがに少しも心配いりません。試験が近いとのこと、それがすんだら長い休みだなア、僕は年中無休だ。少々浦山しい。しかし君もその間作歌に精進出来る。お互に芸術は年中無休だ。

暇があれば手紙をくれ給へ。

頭脳混乱　何を書いたやら分らぬ。読み返す気にもなれぬ。脱字多からん。之をゆるせ。

十一年六月十五日

椿々居士

湖枯魚老大師

ほろほろと泪が散つたわ。

静かにねれば日暮どき、寂しく想ふ子ろのこと。

お軽お軽どこへ行く。わたしゃ売られて行くわいなア。

七月一日　午後、伏見局消印。手紙。

端書みた。

実に渓山人〈富田渓仙・一八七九ー一九三六〉氏の死は精神的にも物質的にも僕を悲しませた。渓仙氏と三十年来の知己である〓氏が僕を陶器の方にすゝめてくれたんで、将来渓仙氏には随分世話にならねばならぬから　相当な作品が出来る様になつたら紹介しよう。さうして氏を頼りにして行く様に。といふ様な次第だから　君の場合と又ちがつた意味でだ。

そして　陶器に絵を描く以上　氏の指導を受けることが、僕の念願だつた。そしてそれ以上に氏の作品を敬慕した。

それが　今では全部　水泡となつたのだ。

直へただ〉〓氏は〈横山〉大観氏や〈近藤〉浩一路その他院展の同人とは親交のある人、だから　その方面には都合がよい。川端竜子が洋画から日本画に転向したのは〓氏のすゝめによる。

君の長歌はあまり作らないためか　短歌から見て　見劣りがする。しかしはじめの方はすきだ。

先日も尋ねて来てくれたさうでまことにすまぬ。正確な図は次の如し。〈地図は紙面の都合で省略する〉

来る時は端書一本たのむ。

七　月　五　日　　午後、淀局消印。はがき。

旅を終へて今しみじみと落ちついてゐる。今手紙をみたところだ。

川千鳥もとなも鳴けば川の瀬のせせらぎさびし夕月夜かも。

高山のこごしき嶺に国人は畑をひらきてとぼしく住めり。

い、歌は出来なかつた。それでも〈高知県の〉吉野川の渓谷。物部川の千鳥。故郷〈高知市〉の家の桑畑。皆なつかしいものばかりだつた。

水甕へは三月後にのるだらう。小生は〈ペンネームを使わず〉名前の通りで発表した。臨海学校へ俺もつれてゆけ。もの、あはれを知りそめにけり。

春になったふきちゃん

原田道子

山野ふきちゃんは、チーという小鳥をかっています。

ふきちゃんの家族は、夏吾お父さん、春野母さん、冬太おじいさん、秋子おばあさんです。それからいちょうねえさん、海男兄さん、弟の雪男です。でも春野母さんは、この冬、はいえんで死んでしまったので、七人家族です。父さんは動物病院をしています。毎日、いっぱい動物が来ます。父さん、母さん、ばあちゃん、じいちゃんの名は、あわせて春夏秋冬なので、「なあぜ？」って聞いても、だれもわらって、「さあねえ。」と、とりあってくれません。

チーは、ある日、日なたぼっこをしているまに、どらねこのジムにとられそうになって、羽をけがしました。ふきちゃんはびっくりして、かんびょうしましたが、なかなかなおりません。それに、なぜか今年は、春がきません。いったいどうしたのでしょう。あったかくなったら、きっとけがもよくなるでしょうに。ふきちゃんは、

せめて、日なたにおいてやろうと、さがして、やっと、日なたを見つけて、おいてやりました。
「もっとあったかい所はないかしら。そうだ、お日さまのそばがいいわ。でも、どうやっていこうかしら。」
すると、上に浮いてた雲がするするとおりてきたので、乗ると、すーっと上にあがって、陽の光の方へ近づきました。シラシラ光って、なにも見えないと思って、よく見たら、それは仏さまがおられたのでした。ふきちゃんは、仏さまにいいました。
「仏さま、どうか、私の小鳥チーをすくってください！」
「たすけてやりたいが、それは、春の精がいないとむりだ。」
「それはどういうことですか。春の精がいないなんて……」
仏さまはいいました。
「じつは、春の精は死んだのだ。春の精はおまえの母さんだったんだよ。それだけではない。父は夏、祖母は秋、祖父は冬だったのだ。そして、おまえたち四人兄妹の中にうけつがれているのだ。それで、うけつごうとすれば、おまえは、春の精になって、季節を春にし、チーをたすけることができるのだよ。」
「はい！　私、春の精の役をうけつぎます。」
仏さまは、雲の中から、一本のふえをとりだしました。
「ふいてごらん。そうすれば、春がくる。」
ふきちゃんは、ふえをふきました。仏さまは、

「しっかりおやり。おまえのほかの兄妹も、いずれ、季節をうけもつことになるでしょう。」

そして、雲を下の世界へもどして、、ふきちゃんを帰してくださいました。ふきちゃんの手には、すっかり元気になったチーの入っているかごと、春をよぶふえが、しっかりとにぎられていました。

（一九八三年二月六日）

一　剪　梅　―李清照（五）―

原田憲雄

くれないの蓮はおとろえ　たかむしろ冷やかな秋／薄絹のもすそかかげ／ひとりボートにのりました／雲の中から誰が手紙をよこすかしら／かりがねのかえるとき／月の光が西楼にいっぱい

花はひらひら散り　水はゆらゆら流れ／ひとつのおもいは／ふたかたにへだてられ／この愁い　消そうにもすべがない／眉根からやっと下りたら／ちゃんともういる　胸の上

「一剪梅」は一枝の梅の意。周邦彦（一〇五七―一一二一）の作に「一剪梅花」の語があるところから、この調の名となった。双調。李清照の作にちなんで「玉簫秋（ぎょくしょうしゅう）」の別名がある。

紅藕香殘玉簟秋。

「紅藕」は、くれないの蓮の花。「如夢令」に「うっかり蓮の花の深みにはまりこんだ」の句があった。あれも紅蓮だったのだろう。「香殘」は花がさき衰えて香りもかすかになること。殘は英語のpaintに近い。「玉簟」

の玉は美称。簟は「たかむしろ」、「南歌子」のところで説明した。ベッドにしいたたかむしろが肌寒く感ぜらるときは秋だから「玉簟秋」という。

軽解羅裳、独上蘭舟。

「羅裳」は薄絹のスカート。「軽開」は軽やかにひらめかせる。四世紀ごろの子夜という女人が作ったと伝える「子夜歌」に「羅裳易飄颻、小開罵春風」の句がある。ひらめきやすいスカートがすこしまくれあがったので「まあエッチな春風ね」と舌打ちする若い女の一瞬をたくみに歌う。清照のはそこまではしゃいでいないが「子夜歌」のことばを使っていることは間違いない。「蘭舟」の蘭は木蘭、美称で中国では普通の飾りことば。「如夢令」ではふたりで乗った舟に、いまはひとりで。

雲中誰寄錦書来、雁字回時、月満西楼。

「雲中」は雲の中、山西の大同を中心とする地域が雲中郡とよばれたこともある。いずれにしてもはるかかなたを指すものとして詩文に使われる。「錦書」は手紙の美称。中央アジアの沙漠に勤務する夫に、思慕の心を詩に作り錦に織りこんで送った女が『晋書』の列伝に見える。「誰寄来」たれがよこすだろう、とはよこすものがない現状から発したことばだ。「雁字」飛ぶとき作る隊列が文字のようなので雁をこうよぶ。「回時」ゆくとき共に行った人が、雁のかえって来るときに、まだ帰ってこぬ、とのこころがこもっていよう。「月満西楼」その人と共に見た月が、その人のいぬ西楼に満ちている。この句、「月満楼」とする本が多く、「西」字は調子を合わせるために後人がみだりに加えたものとする説もある。「月満楼」の方が雅だとする意見もうなづけないでは

ないが、少し先立つと思われる無名氏の「御街行」を清照が知っていたなら、ここはその文字を点化して「西楼」としたに違いない。無名氏の作を拙訳だけ次に。

霜ふく風がきつくなりしとねを透る寒さ／一羽の雁が／りょうりょうと／ひとこえごとに ひとこえの悲しみ
送る／雲は淡く碧天は水のよう／上着きて起ち／雁にいう「ちょっと待て／おれのいうこと聞 いてくれ
塔の南のまちのなか／第三の／橋のあたり／河にのぞんだ西岸の小さな紅楼／門前に青桐のあるきれいな階
段／お願いだどうか／声を低めて飛んでくれ／あすこの人が眠れぬといけないからな」

この作は形式・内容ともにめずらしく、表現もすばらしい。清照より後の作ならいざしらず、先立つものを彼女ほどに詞にくわしく熱心な者が見捨てようはずはなく、見付けておのれの作に利用せぬことはあるまい。

以上が前段で、韻字は、秋・舟・楼。次は後段。

花自飄零水自流。

花は花でひらひら散り、水は水で流れ去る。花と水は同時の運動に身をまかせているが、花を動かすものと水を動かすものとは違っていて何の関わりもなく、花は花を、水は水を 動かす目に見えない力にあやつられて、散りおち、流れ去る。

一種相思、両処閒愁。

男と女は一つの思いで結ばれているはずだのに、ふたりは空間の両処に隔離され、そこに「閒愁」そぞろのうれいがわきあがる。

此情無計可消除、才下眉頭。却上心頭。

「此情」はいうまでもなく前句の愁いである。そうしてこの「愁」が次の二句の主語。「才…却…」は英語の as soon as にあたるであろう。いまの中国語では「才…就…」。この三句はまったく口語である。追っ払いたい愁いめが、やっと眉のあたりから下りたと思ったら、ちゃんと胸元に上っている…。駄々をこねるような口ぶりがおもしろく、conceitのきいた John Donne の詩を読むようなところもあるが、底の方から水のようにわき出るうれいは、さすがに李清照のものだ。

後段の韻字は、流・愁・頭・頭。

この詞は、結婚の後まもなく、夫が長途の旅に出ることになり、別れに耐えかねた清照が、錦のハンカチに書いて贈った、という伝えがある。黄盛璋氏は、（一）別後のもので、送別の作ではない。（二）「軽解羅裳、独上蘭舟」の句は、離れ去ったのが清照で、夫が旅立つのではない。（三）結婚のとき太学生、二年後仕官し、いずれも都にいた明誠が長い旅に出られるはずがない。という。また王学初氏は、（一）ふたりが結婚したとき、両家が都に家居し、夫は太学生。（二）伝えをのせる本が偽書で信ぜられぬ。とこの伝えを否定する。

たぶん、その通りであろう。ただ、これはさほど後年のものではないであろう。語調が若々しくて、「愁」いといっても、五十歳以後の作の身にしみ徹るそれとは、響きが違う。

太学生が、都を離れることが出来なかったかどうかを、わたしは知らない。仕官した者が任地を離れえないことは、確かであろう。結婚した女は、婚家を離れないのが普通であった。だから黄氏の挙げる理由の（二）がい

ささかのみこみにくいのだが、一一〇二年、清照結婚の次の年、秋七月に、「元祐党人」すなわち新法に反対する人達の追放名簿が発表され、清照の父の李格非は公職からの追放だけではなく都に住むことも許されない部類に入っていて、その禁止が肉身にも及んだらしいから、あるいは清照も父に従って郷里に退居した、というような状況を可能性のうちに考えられようか。

一一三四年、五十一歳の清照は、夫の遺著『金石録』のために「後序」を書いた。「後序」は、あとがき、といっておいていいだろう。そこで彼女は半生を回顧していて、伝記作者がしばしば引用する。結婚前後のことを次のように記す。

わたしは建中〈靖国元年〉辛巳の歳〈一一〇一〉、趙氏にとついだ。そのとき亡父は礼部員外郎、しゅうとは吏部侍郎。夫は二十一歳で、太学の学生だった。趙・李両氏は家柄が低く、万事倹約であった。毎月、一日、十五日の休には、外出し、着物を質に入れ、五百銭を手にし、歩いて相国寺に入り、碑文や果物を買い、帰って向い合ってひろげて鑑賞し、果物を食べ、わたし達こそユートピアの民だと思っていた。……そのころ徐熙の牡丹の図を持って来て二十万銭でわけるという人があった。当時富貴の家の子弟でも二十万銭の金は手にし易くはなかったろう。二、三日手許におきはしたもののどうしようもなくて、還した。

家柄が低いといっても、豪族にくらべてのこと、員外郎は部長、侍郎は次官クラスだから、ともに社会的地位は高い。李格非が「礼部員外郎」であったことについては説があって断定しがたいが、ともかくふたりとも高級官僚の子である。いまのわたし達の生活感覚では想像の及びかねるところがある。とはいっても、明誠は部屋住

みの三男坊で、父に疎まれた学生だから、経済的に豊かといえなかったろう。　休日に小遣いを質借りして買物をしたというのは事実であろう。清照に「暁夢」と題する詩がある。拙訳する。

暁の夢の中で鐘の音につれ／ひらひら雲を上っていった／安期生〈仙人〉の紹介で／蓴緑華〈仙女〉に会った／秋風はほんとにいたずらで／玉の井の花を吹き散らす／給のような蓮の花を共に見て／瓜のようなナツメを一緒に食べた／うっとりするようなその座のお客は／気持がよくって言葉もみごと／ジョークをとばし詭弁を楽しみ／火をいこし新茶をたてる／天帝さまのお役には立たなくても／楽しみは果しなし／人生がこんなぐあいにいくならば／家に帰る必要なし／目がさめて着物きて／さても世間のうるささよ／もう一度見られぬとは分っていても／あああとなげきたくなる

ここに描かれる夢中の仙人・仙女は、ユートピアの民〈原文では「葛天氏之民」〉と自負した新婚時代の明誠・清照夫妻そのままだ。さめてうるさい世間の声に耳をおおうのは、新・旧両党のくだらぬ政争に、何のかかわりもない温和な夫婦の小さな楽しみさえ引きさかれてしまったことをかなしみうらむ彼女の姿なのであろう。

「如夢令」から「一剪梅」まで、どれほどの時間がはさまれているのかは、測定するのは容易でないが、その推移の事情がこの「暁夢」の詩からもれこぼれているような気がする。

一一〇二年、彼女の父李格非が追放されたとき、しゅうとの趙挺之は尚書右丞、執政であり追放する側の大立物であった。彼女は父の赦免を願う詩をしゅうとに贈った。その一句「いかに況んや人間父子の情なるをや」のみが嵐に吹きちぎられた木の葉の一片のようにのこっている。

（一九八三年四月二日）

本稿（一）〈『方向』第一九号二一頁〉に

同書〈中田勇次郎『詞選』〉には李清照は「壺中天」「声々慢」「鳳凰台上憶吹簫」「酔花陰」の四首を収める。中田氏は一九四〇年に『宋代の詞』を出していて、いま手許にないので確められぬが、やはり同じ作を紹介していたように思う。

と書いた。その後、詩人原田昌雄氏が古書店で『宋代の詞』を見付け、貸してくださった。この書にも前記四首の名はあげてあるが翻訳紹介しているのは「添字採桑子」「売花声」「一剪梅」の三首であった。氏の親切によって誤りを正し得、かつは昔の愛読書に再見しえたことに、深謝する。

（一九八三年四月二日）

三日一日、大日本絵画から『森田曠平画文集』が刊行された。リトグラフィー三点、カラーエッチング、エッチング　アクアチント、メゾチント各一点の図版を挿んだ美しい本である。十二章の文章のうち第一の「歴史画のこころ」を副題として、それぞれの文章が森田氏の画人としての遍歴を淡々と語っている。

また方向社同人でわたしの弟の原田禹雄の『天刑病考』が、三月十四日、言叢社から刊行された。同題の論考をふくめ、さきにルガール社から出た『麻痺した顔』と同様、らい療養所の医師としての経験から生まれた随筆が大部分だが、仁科白谷の生涯を素描した「未完の墓碑」歌人山中智恵子を論じた「神います」なども収める。なお、言叢社からはやはり禹雄の『中山伝信録』（訳注）が出ている。ともにお読みいただければ幸いである。

庭の白木蓮が開いたと思ったらもう散りはじめている。眺めながら何も思わない自分に気がつく。（憲雄）